

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.9 2013.07.13

安曇野の「あの世」今昔



シダレヒガンの花が咲き誇る墓地（三郷小倉・南小倉区）

春たけなわのころ、墓地に枝垂れ桜が咲き誇っている光景をよく見かけます。これは安曇野だけでなく、全国で見かけられるものです。

なぜ墓地に桜の木、それも枝垂れ桜が植えられているのか、またそんなことがいつ流行したのかはわかりませんが、美しい花を楽しむことができるのも、先人が植えてくれたおかげです。

しかし考えてみれば、満開の花をつけた桜の古木の華やかさと、お墓に漂う物悲しい雰囲気とが一緒になって目に飛び込んでくるのは、やはり不思議な感じを受けます。華やかに咲いて、音もなく散っていく様子が、墓地の静けさをいっそう深めているような気がします。

私たち日本人は、古来から仏壇やお墓に花を手向け、食べ物を供えて静かに眠る死者を供養してきました。墓地に桜を植えるのは、墓前に花を供えたりするのと同じように、死者に寄り添う気持ちの表れなのかもしれません。

そこで、安曇野の先人たちが思い描いた死者の世界である「あの世」とは、どんなものだったか、考えてみたいと思います。安曇野の歴史をひもといていくと、そこにもさまざまなドラマが隠されていたことがわかります。どうやら「あの世」のイメージは、現世に住む私たちの考え方によって変化を遂げてきたようです。私たちのご先祖様が思い描いてきた「あの世」とはどんなものだったか、それは恐ろしい世界でしょうか。はたまた楽しい世界でしょうか。

さあ、未来に向かって「あの世」の歴史をたどる旅に踏み出しましょう！

◆◆安曇野の「あの世」史◆◆

あの世でも不自由なく（縄文時代～平安時代）

死後の世界＝あの世に対する意識の起源は、日本列島では1万年近く以前の縄文時代に墓が造られたことに求められそうです。安曇野市内では明科北村遺跡で縄文時代（約4千年前）の集団墓地が発掘され、その葬り方から死者や死後の世界への思いがわかり貴重な事例が明らかになりました。

弥生時代から古墳時代では、古墳に代表されるように権力を持った人の墓を調べることで死後の世界に対する考え方が研究されてきています。古墳時代後期になると、市内各所では100基を超える古墳が築かれました。古墳からは葬祭に使ったと思われる食器類が出土しますし、棺には装飾品・武器・馬具など、生活に必要な物が入れています。死者が生前使った道具などをあの世での生活に不自由しないよう配慮して用意するのでしょう。現世からあの世への旅立ちの儀式には、千年以上前でも今の葬儀と共通する部分があります。

奈良・平安時代になると、市内の遺跡から集落の近くに造られた墓が発掘されています。明科古殿屋敷からも、平安時代の墓と、墓に入れた品が出ています。葬られた人の頭の辺には箱入りの布に包まれた鏡や緑や白のうわ薬をかけた焼き物の食器が置かれていました。どれも高価で貴重な品々です。生前大事に使っていた物や日常生活に必要な道具を副葬する伝統は今も続いているのです。



明科古殿屋敷出土遺物集合写真

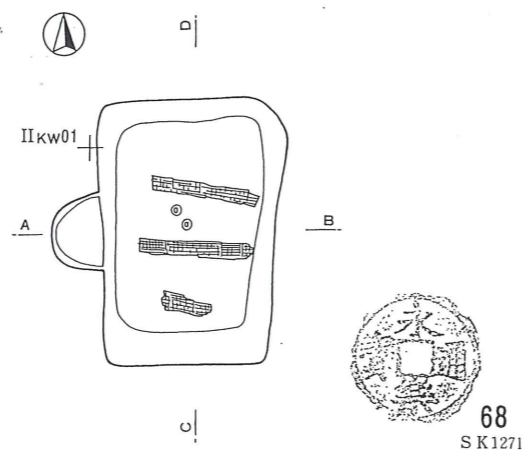
六文銭の起源？（平安時代～室町時代）

仏教の伝来と前後して、火葬の風習も大陸から伝わりました。

松本市北栗遺跡では、平安時代以後の火葬跡がいくつか発掘調査されました。実測図にあるように、火が燃えやすいように壁に煙出しを設けた長方形の穴を掘り、木を組んでその上に遺骸を置きました。火葬後はそのまま土や石で覆って墓とする、火葬墓の例がみられました。

北栗遺跡の火葬墓では、墓穴の中から当時貨幣として使われていた銭が何枚か出てきました。それらは「永楽通寶」などの中国で使われなくなった銅銭で、当時大量に輸入され日本の通貨として使われていたものです。銭の造られた年代から、15世紀以降のお墓であることがはっきりしましたが、他にも入れられた物があったと考えられますが、銭は金属だったため残ったのです。

江戸時代以降現代まで、死後あの世に行くまでにいろいろと必要な物があると言われられてきましたが、特に三途の川の渡し賃である六文の銭は絶対に必要でした。「地獄の沙汰も金次第」のことわざがありますね。はるかに古い時代から、あの世で生活するには銭も必要と考えられていた例で、その意味で六文銭の起源とも言えましょう。



松本市北栗遺跡の火葬墓実測図と出土古銭拓本図（長野県立歴史館蔵）

古文書にみる「あの世」（戦国時代）

安曇野で、あの世に関連した情報が文字で残り始めるのは戦国時代に入ってからです。

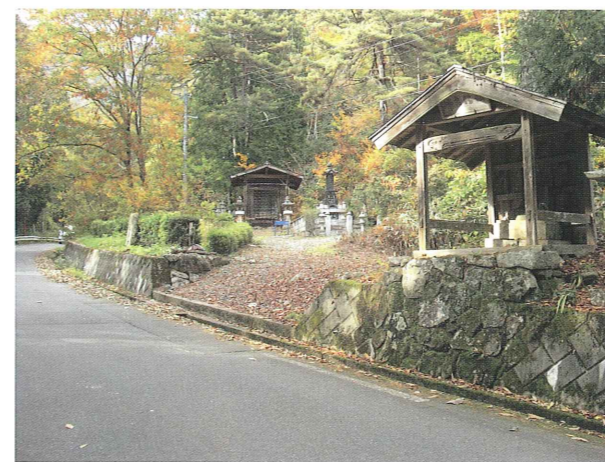
特に穂高牧の栗尾山満願寺は、このころすでに観音の霊場として人々の信仰を集めていました。

当時、寺の僧侶が書いた古文書には、満願寺が「極楽の東門」あるいは「閻魔王宮の最前」であるとされ、あの世の入口として考えられていました。

満願寺の前には「三途の河」と呼ばれる川が流れ、橋も架けられていました。また左右には「死出山」という山があり、この後、道が6つに分かれて、百三十六地獄の様子が再現されているとも書かれています。

松本城主の小笠原氏や、現在の豊科南穂高近辺を治めていた細萱氏らが満願寺にあてて出した文書にも「四手山（死出山）」「あみだ地」「法然堂」など、あの世や仏教と関係した地名がみられます。

満願寺が現在の場所にあったかどうか、また実際の境内の様子はどうかは、分かっていませんが、当時の安曇野の人々の中にも、すでに三途の川を渡ってあの世へ行くというイメージができあがっていたようです。



現在の法然堂（穂高牧）

戦国時代、満願寺は火災に遭って本堂などの伽藍が焼失してしまいました。そこで小笠原氏は、「現世・後生のため」という理由で、安曇・筑摩両郡の番匠（大工）たちを本堂の修理に動員させ

ました。満願寺の復興に協力することで、この世でもあの世でも救われる、と言っているのです。

領主たちの協力もあって、本堂の棟上げが行われることになりました。小笠原氏はこのときも触れを出し、安曇・筑摩両郡の「貴賤」つまり身分の高い人も低い人も志のままに参拝に来てよいけれども、境内で喧嘩などを起こしたら成敗すると、命じています。

中世の満願寺は安曇・筑摩両郡という広い範囲の人々から信仰されていたことがわかります。そして参詣者の多さが江戸時代の参詣道——栗尾道の整備へとつながっていったのでしょう。

四十九日と十王信仰（江戸時代）

民間では、死んだ人の霊魂は49日の間は家の周りに留まっており、四十九日の法要が済んだらあの世へ行く、と言われていました。香典の表書きも四十九日の法要を境に「御霊前」から「御仏前」に変えることは、よく行われていますね。

この四十九日というのは、もともとインドの仏典で説かれていた輪廻転生の思想に基づくものでした。人は死後49日目に生まれ変わる先が決まるというものです。

本来は初七日から四十九日まで、7日ごとに法要を行う形でしたが、現在は、告別式と四十九日以外は省略されている例が多いです。

ところで、みなさんは幼いころ「ウソをつくとも閻魔様に舌を抜かれるよ!」と言われたことはありませんか。

今はほとんど忘れ去られてしまいましたが、江戸時代以前は、閻魔様を含めた10人の王様が「十王」と呼ばれ、十王の木像や絵が寺の境内や十王堂にまつられていました。

十王は、死後の世界に旅立った人々を裁く裁判官です。王によって裁判を担当する日が異なり、死者の行く先が審議されます。四十九日までに7人の王の裁判を受けることとなりますが、それでも結審しない場合は、百箇日、一周忌、三回忌ま

初七日 (7日目)	しんこうおう 秦広王	六七日 (42日目)	へんじょうおう 変成王
二七日 (14日目)	しよくおう 初江王	七七日 (49日目)	たいざんおう 太山王
三七日 (21日目)	そうていおう 宋帝王	百箇日 (100日目)	びやうどうおう 平等王
四七日 (28日目)	ごかんおう 五官王	一周忌 (1年目)	としおう 都市王
五七日 (35日目)	閻魔王	三回忌 (2年目)	ごどうてんりんおう 五道転輪王

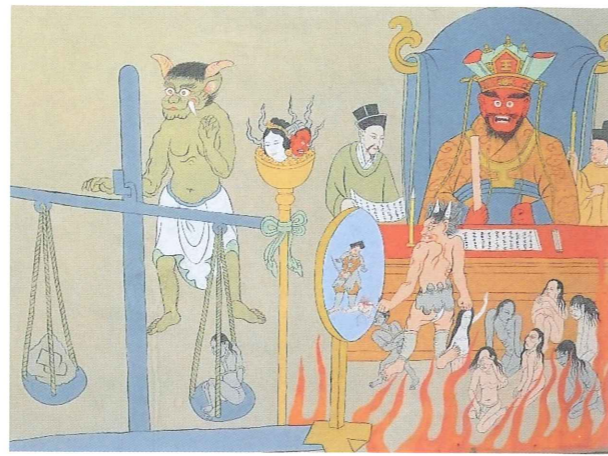
裁判を担当する十王

で裁判が延びます。

このなかでも最も有名で、十王像のなかでもひとまわり大きく造られているのが閻魔王です。各地の寺院で見られる地獄絵図には、獄卒と呼ばれる鬼や、役人を従えた姿がみられます。

そこでは死者の生前の行いを浄玻璃の鏡に鮮明に映し出し、その罪を裁いている恐ろしい姿が印象に残ります。

閻魔王はもともとインド発祥の神様ですが、十



閻魔王の裁きの図 (豊科高家・金龍寺蔵)

王は皆、中国の役人の服装をしています。閻魔王以外の王様は、中国の道教の影響を受けて十王に列せられたようです。例えば太山王は、泰山府君とって、中国では地獄の判官として人の生死を司ると信じられていた神様です。インドや中国の死後の世界の考え方が入り混じり、十王信仰と

コラム① 弥次さん喜多さんも目にした安曇野の「あの世」

弥次郎兵衛と喜多八の凸凹コンビが繰り広げる珍道中といえば『東海道中膝栗毛』ですが、作者の十返舎一九は統編も書いています。その名も『統膝栗毛』。



『統膝栗毛』の満願寺の挿絵 (豊科郷土博物館蔵)

境内の手前には法然堂があり、「男鹿の松」という名木が生えていました。また「無明橋 (微妙橋)」のほかに、罪の深い人が渡るといふ「畜生橋」も架けられていました。

境内には、本堂、如意輪堂、閻魔堂、十王堂など36もの堂が薨を並べ、梁に彫刻を施し、柱に絵か模様を描かれていたといひます。麓からの18丁 (約1.8キロメートル) の坂道を登ると、仁王門や山門が雲間に高くそびえ、松や杉の古木が森々と生い茂っていたなど、が往時の威容をうかがい知ることができます。きっと安曇野に取材に来た一九も満願寺で「あの世」を体験したことでしょう。

いう形になって、日本にやってきたことがわかります。

十王信仰が日本に入ってきたのは平安時代の終わりころのようですが、安曇野に入ってきた時期ははっきりしません。満願寺の境内に残されている1体の石造十王像には寛永3年 (1626) の銘が入っており、このころには安曇野でも十王が信仰されるようになっていたと考えられます。

廃仏毀釈で変わったあの世 (明治時代)

明治時代に入ると、松本藩は廃仏毀釈を進めます。

これは仏教や民間信仰をしりぞける運動で、神道が国の宗教と定められたのに伴って、国内各地でさかんになりました。

廃仏毀釈は明治政府の政策ではなく、神官や国学者らが起こした運動でしたが、松本藩では藩主であった戸田氏が自らの菩提寺を廃止するなど、藩が積極的に取り組む姿勢を見せました。これは、明治維新に伴う戦争の中で、松本藩が官軍に属するのが遅れ、明治政府に対して汚名返上を図ろうとしたため、と考えられています。

明治4年 (1871) の廃藩置県により松本藩が廃止されると、廃仏毀釈の動きは収まりますが、安曇野でも多くの寺院や仏像が破壊されるなど、大きな爪あとを残しました。

満願寺も廃仏毀釈の対象となりましたが、のちに熊倉村 (現豊科高家) 出身の僧・丸山貫長師の努力により復興されました。しかし、堀金烏川にあった大同寺や安楽寺など、破壊されたまま復興できなかった寺も少なくありません。

十王をまつた十王堂もほとんどが取り壊されてしまいました。現在穂高に残る個人所有の木造の十王像は、明科の龍門寺へ預けたため保存状態が良く残されました。

廃仏毀釈や近代化の波に押され、十王はほとんど忘れ去られてしまいましたが、死者を供養する風習は今でも忘れられずに続けられています。



廃仏毀釈の難を逃れた十王 (閻魔王) 像 (穂高・個人蔵)

新盆は満願寺まで精霊迎えに (昭和50年代ころまで)

安曇野市内では家族を亡くしたその年の新盆は、宗旨などに関係なく、どの家も満願寺まで新盆を迎えに行きました。新盆が我が家に来るのに迷ったりしないように迎えに行く風習は日本各地で行われており、いっしょにいろいろなお精霊も付いてくるのでそれも迎えるのだそうです。8月9日の朝早く家を出て満願寺へ迎えに行くのは、相当広い範囲で行なわれていたようで、何と明科からも出かけていたといひます。

少し前のこの風習について、満願寺ご住職の丸山公晃さんからお話を伺いました。

「つい20年、30年前までは、本当に多くの方が朝早くから歩いてこちらまでお迎えに来ていました。暑い時期ですので涼しいうちに戻りそれから朝飯をと、暗いうちから満願寺を目指したのです。特に明科の方々は前日満願寺で泊まられて、早朝に帰宅されることもありました。最近では、ずいぶんお迎えの人数が減り自動車でお迎えに来るなど、大きく様変わりしています。」

三郷の一部では平福寺にお迎えに行く地区があるようですが、多くの地域では、あの世のたずまいが各所で感じられ、廃仏毀釈の難に遭っても唯一取り壊しを免れた満願寺に迎えに行ったのでしょうか。参道でもある地元の牧地区の子供たちは仏像にあげる花を売り、大人は牧大根など秋野菜の種を売る出店を設けるほど新盆の迎えでにぎ

わったのです。

「お迎えに来ましたよ。さあさあ私の背にお乗りください。」と実際に背負う姿のままで戻っていくのが通例でした。こうして新仏様が戻ると、近所や親戚の方が家を訪ね仏様の前に線香をあげて安曇野の新盆は始まるのです。

◆◆訪ねてみよう！◆◆

—安曇野の「あの世」ゆかりの地—

栗尾道—満願寺参詣道

江戸時代、満願寺への参詣は、一般の人々の間でも盛んに行われました。栗尾道と呼ばれるその

コラム② ご先祖と過ごす4日間

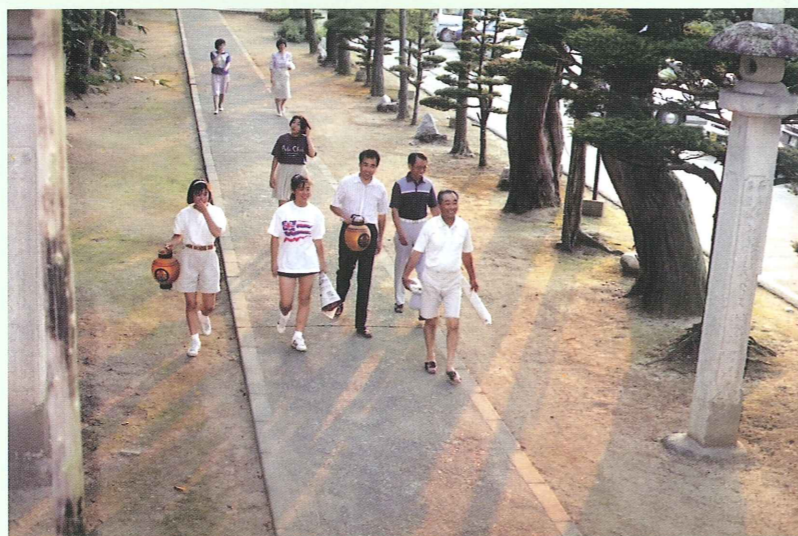
信州の夏では8月13日からのお盆行事が最も重んじられ、お盆が終わると秋を感じる人々が多いようです。

地獄の釜の蓋が開くお盆は、ご先祖様が我が家にお客に来る日でもあるのです。8月に入る頃からお墓掃除をし、盆棚や提灯・カンパなどの準備を進めます。特に新盆がある家は、親戚や隣組からの見舞い客や満願寺の精霊迎えて忙しくなります。

13日のお盆スタートはお墓にご先祖さまを迎えに行きます。お迎えは夕方早めで、我が家だけ取り残され気の毒にならないよう夕方早め行き、提灯で道案内し背負ってお迎えするのです。ご先祖様には盆棚で落ち着いていただき、その前に一家勢揃いして天ぷらや干鰯の煮物にご飯のご馳走を一緒にいただきます。盆の間は、各家でご先祖さまを思いつくる3食それぞれの食事をご先祖さまに差し上げ、同じものを家族も席をいっしょにして食べるのです。

15日からはお帰りいただく準備に入ります。まず、持ち帰っていただくお土産として米粉団子を作るのです。16日には最後の朝食を差し上げ、ご馳走も加えたお土産の包みを、早々に川に流すのです。ご先祖さまはじめ仏様は、川の端で勢揃いしてから極楽へ向かうので、先回りして川に流すのです。最近のご先祖さまに夕食を差し上げ、家族みんなでお墓まで送りに行きます。昔は、夕食を家族でいただきながら、名残を惜しむようにゆっくりと送りに行っていました。「来年ござれ」の唱え言葉とともにご先祖さまは帰られるのです。

お盆の4日間、ご先祖さまは生身の人間と同様のようにお客様として接待し、家族の一員としてゆっくり過ごしてもらいます。あの世で生活されているご先祖様だけど、この間はまさに同じ人間という扱いのもとに、ずっといっしょに過ごすのがお盆といえます。



送り盆の様子 (平成3年)

参詣道は、豊科の新田^{しんでん}を起点とするルートが有名です。このほかにも穂高と北穂高狐島区からの2本のルートが存在していたようですが、すでにどこを^{しんでん}通っていたのか、わからなくなっていました。

元禄2年(1689)には、新田村の庄屋・藤森与兵衛^{へいゑ}が栗尾道沿いに道標^{どうひょう}を立てました。現在も何ヶ所か残っており、新田村から満願寺までのルートがおおよそ道のあたりを^{しんでん}通っていたのか、知ることができます。



現在も残る栗尾道の道標 (豊科南穂高・細萱区)

満願寺の近くまで来ると、「観音大士^{かんのんだいし}」と大きな字で彫られた丁石^{てんぼう}もあります。天保3年(1832)に建てられたものです。このほかにも満願寺への道標^{あつ}がいくつかみられ、当時の人々の信仰の篤さをうかがい知ることができます。



「観音大士」と刻まれた丁石 (穂高牧)

『穂高町の石造文化財』などを参考にしながら道標を探してみるのも面白いかもしれませんね。

長尾山平福寺

三郷の上長尾にあるお寺です。前にも触れたように、三郷の一部の人々は新仏を満願寺ではなく、平福寺に迎えに行くといわれています。

境内には百体観音^{ひゃくたいかんのん}とともに、十三仏^{じゅうさんぶつ}の石像も並んでいます。死者は7日ごとに十王の審判を受け、7日ごとに十三仏に守ってもらえると言われています。初七日は不動明王^{ふどうみょうおう}、二七日は釈迦如来^{しゃかにょらい}というように、担当する日が決まっています。実は十王は十三仏と一体であるとも言われています。

また、平福寺に古くから伝わる品々が展示されている絵馬堂には、三途の川で死者の衣服を奪い取る奪衣婆^{だつえぼ}の木像などもみられます。



平福寺の十三仏 (文殊菩薩) (三郷温・上長尾区)

田尻の目赤不動

堀金三田・田尻区^{めあかふどう}の目赤不動は、安土桃山時代に造られたと伝えられ、安曇野市の有形文化財になっています。

江戸時代、この近辺には目赤不動を本尊として安置していた正福院^{しょうふくいん}のほか修験道^{しゅげんどう}の寺院が立ち並んでいました。『堀金村誌』には、この一角に十王堂も置かれていたと記されています。

現在、目赤不動の堂内に、小さな石像が納められています。地元では伝えられていませんが、十

王の一人と、奪衣婆の像と思われます。

しばらく屋外に置かれていましたが、石仏の破損や盗難が相次いだため、堂内に入れたとのこと
です。

不動堂内は施錠されているため、普段は見る
ことができません。毎年5月と11月の2回、目赤不
動の縁日がありますので、訪ねてみてはいかがで
しょうか。



目赤不動堂内の十王と思われる像

◆◆「あの世」への意識◆◆

——変わるものと変わらないもの——

六道輪廻を教える理由

仏教では、死者が十王の審判を受けた後、生前
の行いによって六道——6つの世界のいずれかに
行くと言われてきました。さまざまな責め苦を受
ける地獄、飢えに苦しむ餓鬼、動物に生まれ変
わって重労働を科せられる畜生、戦いに明け暮れ
る修羅、私たちの世界でもある人間、そしてお
おむね幸せな一生を送ることができる天の6つです。

多くの人は生前、良いこともすれば悪いことも
してきています。そこで裁判を行う十王たちは、



満願寺「地獄極楽変相之図」
(六道輪廻の場面)

この世に残された家族たちの供養も考え合わせ
て、より良い世界に生まれ変わらせるための判断
材料にしている、ということです。

各地のお寺には、「六道輪廻之図」「地獄極楽変
相之図」などといった、地獄や十王の審判、極楽
浄土などを描いた絵図があります。これを見た人
が死後に地獄などの世界に行つて苦しみを受けない
ように、生前のうちに悪い行いを戒めて正しい
行いを勧めるためのものです。

またそれと同時に亡くなった人が幸せな死後の
生活を送れるように、供養を勧めるものでもあり
ました。

しかし、そのような六道の教えを知らなくても、
また仏教以外の宗教を信仰している家庭でも、亡
くなった先祖や家族の供養を行っています。宗教
や教義に関係なく、生前お世話になった故人に対
する感謝の気持ちを表わしているのだと思います。

現代の埋葬や供養の多様化

最近、「終活」という言葉が聞かれるようになり
ました。生前のうちに自分の死後の葬送や埋葬
の方法などを決めておく人が増えています。

これまでも、死や死後の世界に対する意識は、
政治や宗教の影響を受けたりして時代とともに変
化を続けてきました。

しかし、亡くなった家族や親戚、知人を死後の
世界へと送り出し、あの世で安らかな暮らしがで
きるように供養する気持ちや、亡くなった人を慕
う気持ちは、今も昔も変わらないようです。

たとえ死後の世界に対する意識が変化したとし
ても、先に旅立った親族や先祖たちに生前のおつ
きあい感謝し、あの世の生活を応援するつもり
で、あの世へ思いを馳せてみたいものですね。

「ふるさと安曇野 きょう きょう あしたNo.9」
発行日 平成25年7月13日
編集 安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205 長野県安曇野市豊科郷土博物館
TEL 0263-72-5672 / FAX 0263-72-7772
URL : <http://toyohaku.jugem.jp>